

若年脳卒中患者の復職可能性を歩行速度で予測

脳卒中の既往がある人の4分の1が65歳未満の若年成人であり、そのうち44%の人が主に歩行困難のために復職が困難となっている。若年成人における脳卒中後の歩行について検討した研究はこれまでに行われていない。本研究では、若年成人の脳卒中がその後の歩行速度や歩行代謝コストにどのように影響するか、また、歩行に関する指標で脳卒中後の復職可能性を予測できるのかについて検討した。

英国ウェールズの6施設の脳卒中既往歴のある患者46例(脳卒中群:18~40歳が6例、41~54歳が21例、55~65歳が19例)と、年齢を一致させた健常者15例(対照群)が対象となった。脳卒中のタイプ、部位、原因、人口統計学的要因(雇用状況など)を記録し、時間的および空間的歩行パラメータは三次元歩行解析を用いて測定した。また、酸素消費量から3分間の歩行での代謝エネルギー消費量と代謝コストを求めた。結果、脳卒中群は、対照群比べて歩行速度が遅く($P<0.004$)、歩行効率も悪かった($P<0.002$)。また、脳卒中後に復職できた人の割合はわずか23%であった。歩行速度が復職と最も強く関連し、復職の有意な予測因子であった(感度0.90、特異度0.82、 $P=0.004$ 、カットオフ値0.93m/秒)。歩行速度が0.93m/秒より速い人は、遅い人に比べて復職できる割合が有意に高かった。

したがって、歩行速度が脳卒中の既往のある若年成人の復職予測に有効であることが示唆された。この指標を用いることで、運動機能を維持するためのリハビリテーションに患者を導き、復職の時機を示すことができるであろう。

出典:Stroke. 2019 Sep 26: STROKEAHA119025614.